

エルサルバドル体験記

私が初めてエルサルバドルに行ったのは、20世紀最後の四半期でした。

サンサルバドル大地震（1986年10月10日）の翌年にグアテマラ市から小型バスに乗って、サンサルバドルに辿り着きました。その2年後には、修士論文作成のために、サンサルバドルの国立博物館に行きました。当時は内戦のために、博物館は閉まっていたのですが、偶然、博物館を管理している方に会って、館内にある遺物を見せていただきました。その後、チャルチュアパ市にあるタスマル遺跡公園に行って、石彫の写真を撮り、情報を収集しました。お陰で、修論も無事に提出することができました。その時にあった人たちは、とても親切で親しみが持てました。

その後、バブル経済の余韻がある1990年代にグアテマラの考古学調査(1991-1994年)を経て、チャルチュアパ遺跡で本格的に考古学調査を始めることになりました。当初はメキシコの留学時代に買った日産の小型ピックアップ(写真1)を、毎回メキシコから1000km以上離れたチャルチュアパ市のカサ・ブランカ遺跡公園まで運転してやってきました。途中は、中米の自然と遺跡を見て回ることが楽しみで、様々なところに立ち寄りしました。しかし、関所のようなメキシコ-グアテマ



写真1 メキシコのお車

ラ国境とグアテマラ-エルサルバドル国境の税関を通過しなければなりません。税関にいる職員は毎回いうことが異なっており、その受け答えするのに四苦八苦でした。一度は、車検証に記載されているエンジンの番号と車検証の番号が違っていたために、わが愛車を税関のある国境に残しておんぼろの小型バスに乗ってアワアチャパンに行き弁護士に番号が違っているという書類を作成する羽目になったこともありましたが、現在は、中米の税関は面倒な手続きもなく比較的簡単に通れるようになりましたが、当時は大変でした。現在はエルサルバドルのナンバープレートの車を使っているの、何不自由なく動き回ることができています。

遺跡の調査は、チャルチュアパ市にあるカサ・ブランカ遺跡公園を拠点として実施してきました。考古学調査を始めたのは、京都外国語大学の先生であった大井邦明教授が調査の指揮を執ったカサ・ブランカ遺跡公園でした。当時は遺跡公園として公開されておらず、以前は農園であった名残である倉庫などの建物があるのみでした。遺産局の局長であったマリア・イサウラ・アラウスさんの依頼で、遺跡公園として開園できるように考古学調査を実施してほしいということが発端でした。大井先生が代表者となった科研費(科学研究費補助金、1997~2000年)を使っての調査でした。この調査では、発掘調査もさることながら、建造物の修復をして一般公開できるように必要な修復保存作業もしました。遺跡公園で公開されている1, 2, 5号建造物はその成果です。



写真2 発掘の屋外展示

その後、2000年から私が中心となって、調査をしています。当初は、調査をするための資金がないために、殆どが調査参加者の自腹でした。そのために、調査する範囲も限られていました。現在は整備されてみる事ができる4Nトレンチが我々の最初の調査でした。雨季には雨が大量に降るので、雨が降った時にはトタンで屋根を掛けて倉庫兼事務所兼研究室である建物に逃げて、出土した土器などの遺物を洗いました。その後、2002年8月には、日本政府の援助とエルサル



写真 3 日本とエルサルバドルの学生の交流

バドル政府の資金で藍工房+資料館が建てられて、遺跡公園として一般公開されることになりました。また、2000年からの調査成果は、博物館の西側にある屋外展示で公開されています。この屋外展示は当初トタン屋根の粗末なものでしたが、日本政府の資金で立派な屋外展示となっています(写真2)。地表下の発掘された階段状の遺構と積み重なった層が見られます。

その後、2005年には科研費が採択されたために、カサ・ブランカ遺跡公園から北にあるタスマル遺跡公園の発掘調査(2004~2014年)をしました。調査では、エルサルバドルの考古学専攻の学生の実習も引き受けました(写真3)。日本人研究者が考えた仮説に基づく調査でした。墓などが出土しました。トンネル調査をして眠っているであろう王墓を見つけることも考えましたが、危険性があることなどから断念しました。今はきっと、安らかに古代文明の王さまは眠っていることと思います。また、日本からの学生と現地の人たちとの交流も図りました(写真4)。

そして、2012年からは、エル・トラピチェ地区にあるサン・アントニオ(コーヒー)農園で調査をしています。現在も進行中の調査です。この農園では、最先端の地下レーダー探査技術を使って調査をしています。地下に眠っている「お宝」をさがすのです。この「お宝」はTVの鑑定団にとっての「お宝」でなく、私が修士論文を書いた時からの調査対象である「石彫」です。地下レーダー探査では、地中の異常な部分を見つけ出すことができます。しかし、それが石彫であるか?単なる石であるか?それとも土と異なる「?」なのかは掘るまでわかりません。それでも、今までの調査結果などを考えて、掘



写真 4 ププサとカレーライス



写真 5 動物頭部石彫の発掘

る地点を定めました。すると、発掘を始めた2012年に、動物の頭の形をした石彫が2基出土しました（写真5）。この動物頭部石彫は、その北側にあるエルサルバドル最大の建造物の階段前に据え付けられていたことが分かりました。ちょうど日本の神社などにある対の狛犬のように、神殿ピラミッドを守る役割をしているかのようなようでした。また、2018年3月には、マヤを含むメソアメリカ文明では最古級の日付（長期暦）を持つ石碑片が出土しました（写真6）。

このように、楽しい時間を過ごしてきたサン・アントニオ農園ですが、コロナ禍で渡航することも現在ではできません。現在、発掘調査後に地主夫妻が用意してくれたコーヒーを再び味わえる日を唯一の希望として、狭い研究室に閉じこもり研究資料の整理・研究をしています。コロナが治まりましたら、ぜひ、サン・アントニオ農園を訪れて、出土した動物頭部石彫をご覧ください。また、地主夫妻は観光にも力を入れています。家族若しくはグループで遺跡の中でのひと時を過ご

し、遺跡で採れたコーヒーを味わいながら、食事を楽しみたい方はサン・アントニオ農園（写真7：<https://www.facebook.com/fincasanantonio.chalchuapa/>）にお問い合わせてください。



写真6 メソアメリカ最古級の日付を持つ石碑



写真7 サン・アントニオ農園

伊藤伸幸（いとうのぶゆき）氏

1987年に内戦下のエルサルバドルに潜入する。1997年からチャルチュアパ遺跡考古学調査に参加する。2000年からは名古屋大学考古学調査団の指揮を執り、チャルチュアパ遺跡（カサ・ブランカ、タスマル、エル・トラピチェ地区）、チキリン貝塚を発掘。現在は、名古屋大学大学院人文学研究科に所属し、エル・トラピチェ地区で発掘調査に励んでいる。